

家族システムの変遷

—国家とイデオロギーの世界史

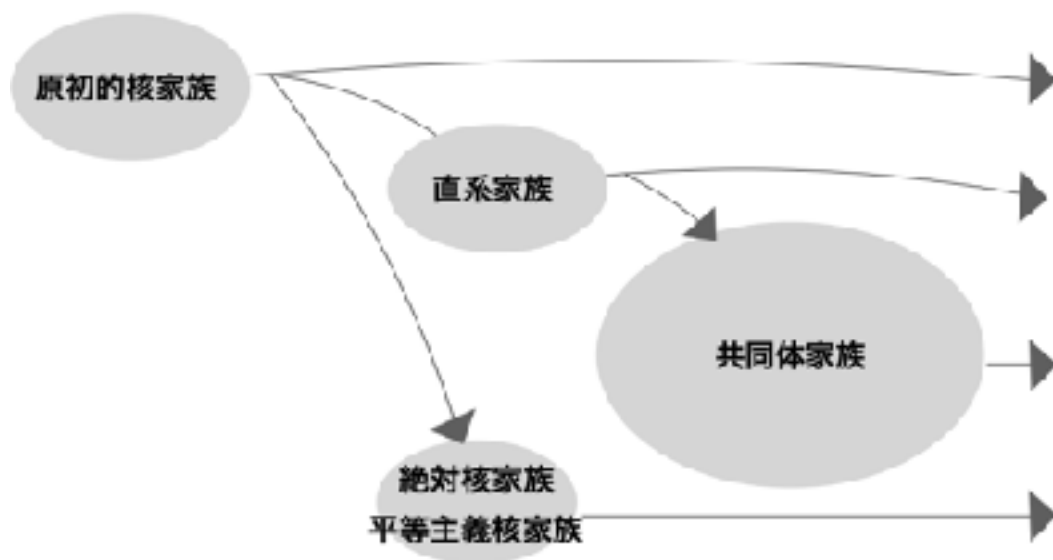
(1) イントロダクション

はじめに

家族システムは「進化」する

家族システムは変化します。しかし、人類が自分の意思で変えられるかという
と、変えられない。私たちにできるのは、知ること、理解することだけです。

家族システムの変遷の過程は、生物の進化の過程とよく似ています。当人たちの
意思とは無関係に変化が起こり、環境に適したものが生き残り、数を増やしてい
く。そして、その「進化」は、人類の無意識を通じて、世界を変えていくのです。



エマニュエル・トッドは、家族システムが、大まかにいうと、この図のような流
れで「進化」したことを突き止めました（ただし、この4つの楕円の周辺には無
数のバリエーションがあり、中間的な形態があることは頭に入れておいてくださ
い）。

しかし、彼は、家族システムとイデオロギーの相関性を発見した当初から「進化」のヴィジョンを抱いていたわけではありません。以下は、「偶然」と題された『第三惑星』最終章（結論部分）からの引用です。

「いかなる規則、いかなる論理とも関係なく地球上に散らばっているように見える諸家族構造の配置が示す地理的一貫性の欠如は、それ自体ひとつの重要な結論なのである。この一貫性の欠如は、社会科学によって疑わしいものとして捉えられているが、遺伝学によって次第に認められてきたあるひとつの概念を想起させるものである。つまり偶然という概念を。」

「20世紀の歴史を決定したイデオロギー分布の源には、家族の存在があったのである。しかし地球におけるイデオロギーの歴史とは、人類学的な条件を基底にしながらも、偶然が介入することによって生まれた目的を持たない運動なのである。」

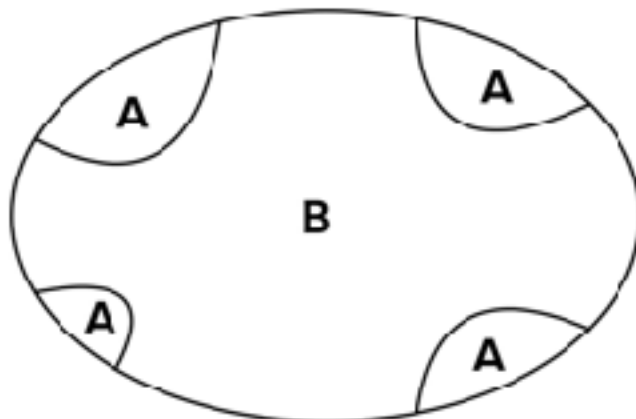
『世界の多様性』（292頁）

周辺地域の保守性原則

様々な家族システムの配置を「無意味な偶然」と捉えていたトッドの目を覚まさせたのは、友人のローラン・サガール（言語学者）でした。彼は、『第三惑星』を読み、家族システムの分布地図を見た後で、言いました。

「他の部分は実に興味深い。しかし、「偶然」の部分で言っていることは、いい加減だ。周縁地域の保守性原則を承知している研究者なら、君の言う共同体型というやつ、ここに赤だかベージュで塗られているのは、一続きの中央部的塊をなしており、濃い緑の直系型や青や薄緑の核家族型は、周縁部に分散しているということを、すぐに見て取るはずだ。これからすると、何らかの時期に、ユーラシアのどこかの中心点で共同体型への転換という革新が起こり、それが周縁部へと広がって行ったが、まだ空間全体をすっかり覆い尽くしてはいない、ということであるのは明白だ」。（『家族システムの起源I ユーラシア 上』31頁（脚注6）→以下「起源」として引用）

周辺地域の保守性原則



特徴Bが一続きの中心地域を占め、特徴Aが孤立した周縁地域を占める場合
Bは何らかの革新が広がったものであり、
Aは空間全体でかつて支配的であった特徴の残存である可能性が高い

上は「周辺地域の保守性原則」の説明図です。家族システムの分布図を当てはめると、「特徴B」に当たるのは、ユーラシア大陸中心地域を占める共同体家族システム、「特徴A」に当たるのは、周縁地域に散在する核家族システム（や直系家族システム）ですから、彼の言う通り、その示唆するところは明白です。

地球上に散らばる家族システムの配置は、「いかなる規則、いかなる論理とも関係（のない）……偶然」ではまったくなく、「進化」の存在を明瞭に指示していました。中心に広がる共同体家族が「革新」であり、核家族がより古く原初的なシステムの残存であるという事実を、はっきりと示していたのです。

トッドは、家族システムの何たるかもまったく知らないサガールが、ただ単に地図上の地域の色と配置だけを見て、トッドの研究主題の核心を言い当てたことにショックを受けつつも、これを受け入れました¹（「彼の立論は論理的に反論の余地のないものだった」と述べています。）（同前）。

この「ブリコラージュ」のおかげで、そして彼らの友情のおかげで、私たちは、「家族システムとイデオロギーの相関性」という、血液型占いの（？）世界を

¹ この直後に彼らは共同で論文を執筆している。E. TODD, Laurent SAGARD, Une hypothèse sur l'origine du système familial communautaire, in Diogenes, no 160, octobre-décembre 1992. (邦訳は「新人類史序説—共同体家族システムの起源」（石崎晴己・東松秀雄訳）として『世界像革命』（藤原書店, 2001年）に掲載されている。）

大きく超えて、人類学を基礎とした世界史の書き換えという壮大なヴィジョンを見せてもらえることになったのですから、「ありがたい」としか言いようがありません。

私としては、恩返しのつもりで、以下の文章を書かせていただきます。

家族システム、国家、イデオロギー

この講座では、家族システムの変遷が世界史を動かす様を、主に「国家」に着目して見ていきます。

なお、トッド自身は、家族システムと歴史的な国家形態との関係を体系的に論じたことはありません（随所で匂わせてはいますが）。したがって、今回の講座は、「トッドの理論は、誰にでも使える」という謳い文句に従い、トッドの理論の紹介と、講師自身の「使用例」を兼ねたものとしてお読みいただければと思います（理論の紹介および解説の部分には出典を入れ、分かるようにしたいと思います）。

国家の歴史は、世界史の教科書的常識では、神権政治による専制国家から民主主義による近代国家（国民国家）への発展の歴史と捉えられています。

しかし、家族システムが「大家族から核家族へ」ではなく「核家族から共同体家族へ」進化したことを知っている私たちには、このシークエンスは、間違いなく「眉唾物」です。

そこで、社会の基底における「核家族から共同体家族へ」の進化を追いながら、その上部で「国家」がどのような変化を遂げたのかを確かめてみよう、というのが今回のテーマです。

トッドが「家族システムとイデオロギーの相関性」という事実を発見したとき、彼の目に映っていたのは、現代という一時点におけるイデオロギー分布と家族システムとの関連性でした。

しかし、多様なイデオロギーの基底にある家族システムの分布が、単なる偶然ではなく「進化」の産物だということになると、射程はぐんと広がります。

家族システムの誕生、そして、「進化」の過程とは、イデオロギーの誕生と「進化」の過程であり、もしかしたら、国家の誕生と「進化」の過程でもある。そういうことかもしれないのです。

家族システム、イデオロギー、国家。この三位一体の「進化」を追うことは、それぞれの家族システムが、世界の構築にどう関わり、どのような価値をもたらしてきたかを確認していく作業となるでしょう。

それは、必ずや、「専制主義から自由主義へ」という単純な（あるいは偏狭な）近代主義とは異なる、複合的で、より公平な、世界の見方を可能にしてくれるはずです。

「進化」の概要

6000年の歴史—メソポタミア紀の導入

家族システムの歴史は、メソポタミアから始まります。実際のところ、「進化」の大部分は（すべてではありません）、紀元前4000年紀から1000年紀の間に、完了している。

多くの人にとって、紀元前の歴史は、「ロマンの対象」くらいにしか考えられていないと思います。しかし、実際には、その時代にこそ、人間にとって本質的な変化の大部分が起きていたのです。

「むむ、これは大変だ……」と私は思いました。

おそらく、現在の「西側」諸国（核家族か直系家族です）と、中東やロシア、中国（すべて共同体家族）が分かり合えないこと、とりわけ、前者が後者を全く理解できないことの背景には、この時期の歴史が「常識」から抜け落ちていることが関係しています。

私たちが現在の世界を理解するためには、そして、多様な家族システム同士の相互理解を可能にするためには、西欧が活躍を始めたここ数百年の歴史を切り取るのではなく、約6000年の文明の歴史を視野に入れて、それぞれのシステムを捉える必要があるのです。

そこで、この講座では、視野を広げるための一つの方法として、「メソポタミア紀」という新しい暦を導入することにしました（「メソ紀」と略します）。紀元

は、紀元前3300年、メソポタミアにおいて文字が生まれたとされる年とします（年代は諸説あります）。

メソ紀	元年	楔形文字誕生
メソ紀	2000年	中国で文字誕生
メソ紀	3300年	イエス生誕
メソ紀	3870年	ムハンマド生誕
メソ紀	4817年	ルター 95箇条の論題（宗教改革開始）
メソ紀	4940年	イギリス革命開始
メソ紀	5214年	第一次世界大戦勃発
メソ紀	5245年	第二次世界大戦終了

私がこれを書いている西暦2022年はメソ紀5322年となります（本文では西暦を併記します）。

家族システム、イデオロギー、国家の対応関係

（表1）をご覧ください。進化の方向は上から下です。

（表1）家族システムの「進化」と国家

	親子関係	兄弟関係	国家形態
原初的な核家族	不定（イデオロギーなし）	不定（イデオロギーなし）	なし
直系家族	権威	不平等	都市国家 / 封建制
共同体家族	権威	平等	帝国

出発点は、**原初的な核家族**です。文字や国家の誕生以前、社会の基礎単位は夫婦（+子供）であったと考えられています。

この家族の特色は何よりも柔軟性にあります。子どもが成人した後も親子は必要があれば同居し、同居先は母方でも父方でも、兄弟でも構わない。規則がないのです。

この家族システムは、イデオロギーの未分化状態（まだ生まれていない状態）に対応しています。対応する価値を探せば「自由」が一番近いと言えますが、イデオロギーとしての「自由」とは異なる、野放図な自由です。

関係性を律する規則を持たないこの家族システムは、国家を生み出すことはありません。

原初的核家族からの最初の進化は、通常、**直系家族**をもたらします（メカニズムは次項でご紹介します）。

直系家族システムの誕生とは、一言で言うと、「世代をつなぐ一本の線」の誕生です。一本の縦のラインが親と子をつなぐことで「権威」が発生し、兄弟姉妹から一人だけが跡継ぎとなることで「不平等」が生まれる。そういう構造です。

歴史は、関係性が一本の線で構造化されたこの段階で、小規模の国家が可能になることを教えます。しかし、縦のラインが林立するこのシステムの上に、それほど大きな国家が形成されることはありません。

メソポタミアや中国といった文明の中心地では、直系家族は、まもなく、**共同体家族**に進化を遂げました。

親世代と子の世代をつなぐ縦のライン（権威）を直系家族から受け継ぎ、下半分に子どもたちを対称に配置する（平等）騎馬戦隊構造を持つこのシステムは、その基層の上に、統一国家や「帝国」の誕生を可能にします。そして、システムの強化とともに、帝国の版図は広がっていくのです。

＊この講座では、**帝国**を「一つのシステムによって多民族・多言語・多宗教の人々を統合する版図の大きな国家」と定義します。

（小杉泰『イスラーム帝国のジハード』（講談社学術文庫、2016年）の定義を参考にしました。ただし、同書は「一つのシステム」ではなく「大きな原理」です）。

こうしてみると、家族システムの「進化」の過程とは、「権威」という価値が生まれ、強化されていく過程であることが分かります。「権威」の発生により、初めて、文字が生まれ、国家が生まれる。そして「権威」の強化によって初めて、「帝国」が可能になるのです。

近代主義の洗礼を受けている私たちに、「権威」や「帝国」を価値として認めるのは難しいかもしれません。しかし、メソポタミアに暮らしていた人々にとって、「帝国」の誕生は、福音以外の何ものでもなかったはずで

多様な民族が行き交い、さまざまな宗教や言語、文化を生んだこの地域では、中央の権力が強まり、帝国の版図が広がることは、その分だけ、庶民の生活が安定し、平和になることを意味します。中央の統制が効く範囲が広ければ広いほど、交通の自由と安全が確保される範囲が広がり、異民族による侵略や略奪の危険性は減るわけですから。

それを可能にしたものが、共同体家族の「権威」であり、権威を頂く人々の「平等」にほかなりません。後でご紹介するように、ローマ帝国やオスマン帝国の長い平和も、共同体家族なしにはあり得なかったといえるのです。

さて、ここまでのが、家族システムの「進化」の基本です。……あれ、何か足りませんか。

はい、そうです。ここには、近代の主演であるイギリス、アメリカなどの絶対核家族システムが入っていません。

なぜかといいますと、実は、**絶対核家族**（平等主義核家族もこの点は大体同じです）の発生は、通常の進化系列からは外れた、ちょっと特殊なものなのです。

*以下、絶対核家族と平等核家族を合わせて「純粋核家族」の語を用いることがあります（トッドが『起源』で用いている用語です）。「ひたすら柔軟な原初核家族」とは異なり、「核家族であることをイデオロギー化した核家族」（イデオロギーとして純化した核家族）という意味です。

（表2）家族システムの「進化」と国家+α

	親子関係	兄弟関係	国家形態
原初核家族	不定（イデオロギーなし）	不定（イデオロギーなし）	なし
直系家族	権威	不平等	都市国家 / 封建制
共同体家族	権威	平等	帝国
純粋核家族（+直系家族）	自由	非平等（絶対核家族） 平等（平等主義核家族）	国民国家

先ほどご説明した通り、イデオロギーの未分化状態である原初核家族は、国家を生み出しません。

しかし、彼らがバラバラに暮らしているところに、直系家族がやってきて、国を作ったとすると、どうなるか。

核家族は国家的統合の核を作り出さないで、直系家族の国家との覇権争いや小国の分立状態を生じさせることはありません。彼らは単に、直系家族が作る領邦（小国）の領民になるわけです。

イデオロギーを持たなかった彼らは、しかし、このとき、直系家族が持つ価値体系に触れ、それに対抗する形で、自らの価値体系を作り出すのです。

「権威」に対して「自由」、長子相続（不平等）に対して親の恣意による相続（非平等）を充て、生まれたのが、絶対核家族システムです。平等主義核家族は、ローマ経由で共同体家族の「平等」を受け継ぎつつ、「権威」に対抗して「自由」を掲げました。

純粋核家族に対応する国家は、国民国家（＝近代国家）である、と私は理解しています。

以下のような「国民国家」の特徴には、明らかに、「直系家族によって国家の形を与えられた絶対核家族の国家」という特殊性が反映されているからです。

（１）手頃なサイズ：直系家族が作る小国家に核家族が組み込まれることで、都市国家や領邦国家ほど小さくないが「帝国」ほど大きくない、手頃なサイズが実現しました。

（２）「国民」概念：「直系家族＋純粋核家族」が作る国家は（細かいことを言うと）単一民族ではありませんが、あえて「多民族」というほど、言語や宗教、文化の多様性があるわけでもない。「国民」概念にちょうどよくフィットするのです。

（３）反権威イデオロギー：国家としての第一の関心事が、国民の（国家権力からの）自由の確保（基本的人権の思想）、国家権力の拘束（法の支配）にあるというのが、近代国家の大きな特徴です。思えば、「国家権力への敵意を構造化した国家」とは奇妙なものですが、純粋核家族の国家が、彼らが「被支配民」であることを前提として生まれたことを考えると、無理なく理解できます。

現代の「西側」諸国の価値観は、基本的に、純粋核家族のイデオロギーを反映しています。「国民国家」のスタンダードもそうです。

しかし、それは果たして、普遍性を持ちうるのか。将来にわたって、世界の中心に位置し続けることができるものなのか。

そのようなことも考えながら、続きをお読みいただければと思います。

進化の典型例（中国の場合）

家族システムの「進化」は、「こういう条件があれば必ずこうなる」というような法則性の支配する過程ではありません。しかし、歴史上の「進化」を見てみると、ある程度、共通のメカニズムが確認できることも事実です。

そこで、これからの探究のためのガイドとして、中国を例に（分かりやすいのです）、典型的な進化の過程をご紹介しますとおきたいと思います。

（トッド用語の解説：家族システムの「父系制」と女性の地位）

原初的核家族から共同体家族までの「進化」の歴史は、権威が生まれ、組織が強化されていく歴史であると同時に、女性の地位が低下していく歴史でもあります。それは、夫婦（男女）が対等である原初的狀態から、次第に、夫＝父親＝男性が重視され、男性間の絆の強化とともに、女性の地位が貶められていく過程でもあるのです（私の主張ではなく端的な事実です。なぜこのようなことが起きるのかについては、後で考察します）。

そのため、トッドの『家族システムの起源』では、「イデオロギーなし」の原初的狀態から、権威が発生し、共同体家族の確立・強化に至る過程を、「父系制の強化」という軸に載せて記述しています。

原初的核家族	父系制レベル0
直系家族	父系制レベル1
共同体家族	父系制レベル2
女性の地位の最大限の低下を伴う共同体家族	父系制レベル3

「父系制」という表現は、必要以上に専門的な気がするのですが、この講座では、父系制レベルによる区分は、積極的には用いません。ただ、トッドの文章をそのまま引用するときなどに「父系制」という言葉が出てくる場合があると思います。

そこで、「父系制」とは、父親＝男性をより重視する仕組みを指し、父系制レベルの上昇は、父親＝男性の権威のレベルが上がり、同時に女性の地位が下がる過程であるということを、何となく頭に置いていただければと思います。

また、家族システムの「進化」と女性の地位に深い関係があることから、ある特定の時代・文化における家族システムを探る際、しばしば、当該文化における女性の扱いが重要な指標となることも、覚えておいてください。

（出発点は原初的核家族）

中国周辺の家族システムを見ると、その中心部（中国の中央）を共同体家族が占める一方で、同心円上には、直系家族（中国南東部、日本、朝鮮、ベトナム北部、中央チベットなど）、同じく同心円上の周縁部に、原初的（「絶対」でない）核家族が配置されています。

この配置に「周辺地域の保守性原則」を当てはめてみれば、中国でも、出発点にあったのは、やはり、原初的な核家族であったことが分かります。

原初的な核家族には規則がないので、成人した子ども夫婦が一時的に親と同居することがよくあります（『起源』では「一時的同居を伴う核家族」という分類が用いられている）。

このとき、もともと未分化な核家族は、同居先を選びません。つまり、夫の親でも妻の親でも「どちらでも構わない」（「双方制」）。

多くの場合、ここから、一步目の進化が起こります。一時的同居先の「標準」が、どちらかに（大抵は父方）に決まっていくのです。

「進化」の第一歩は、大抵、「父の系統を重視する」という形で発生するわけです。

（直系家族への進化）

原初的核家族が、直系家族に発展する典型的なケースは、（定住による）農耕文明の中心地で人口が増大し、耕作に適した土地が不足した場合です（トッドはこれを、フランスの歴史家ピエール・ショーニュの表現を借りて「満員の世界」の時代と呼びます）。

新しく開墾する土地がなくなった「満員の世界」で、みんなが食べていくためには、どうしたらいいか。土地を小さく分割すれば、利用効率は下がります。そこで、まずは、土地を分割せずに子孫に伝えること、そして、集約的な農業によって、土地を効率的に利用することが必要になります。

直系家族システムは、このような世界への適応といえます。直系家族とは、土地を特定の一人（多くは長子）に相続させ、彼を家長として集約的農業を営むことを可能にするものですから。

中国では、メソ紀2200年（前1100年）頃²、商王朝末期および周王朝の下で、貴族の間に男性長子相続制が根付き、直系家族システムが定着したと推定されています。

なお、直系家族が生成・定着する時期に、共通に見られる現象がもう一つあります。戦乱です。していく時期に、出現し、強化されていくが出現する時期に、共通にみられる現象がもう一つあります。戦乱です。

「封建制中国は、紀元前722から222年までの間の時間の75%を軍事活動が占めており、今日の調査で分かっている限り最も好戦的な文明のうちの一つを経験したわけである。」

2000年後の封建制ヨーロッパ、封建制日本も同様です。戦乱は、おそらく組織の強化の必要から、直系家族を促進する効果を持ち、また、「長男」の選好を促す要因でもあると考えられます。

（共同体家族への進化）

直系家族への移行は、日本人には非常に理解しやすいものですが、共同体家族については、システムそのものがピンと来ないかもしれません。「進化」の過程を追うことが、システムの理解にも役立てばと思います。

共同体家族誕生の鍵、それは遊牧民の存在なのです。
中国の場合、遊牧民と定住農耕民との交流が契機となりました。

トッドの仮説によると、中国の共同体家族は、つぎのように成立しました。

（1）遊牧民における兄弟の対称性原則の確立

² なおこの年代の正確性については「過大に受け止めないようにしよう」と特に注意が喚起されています。「これは平均的な年代ではなく、むしろ起源点を示すものである。」（起源1・上185頁）

遊牧生活を営む集団においても、初期の家族システムは、原初的な核家族であり、「紀元前4世紀（メソ紀29世紀）までか、もしかしたらもう少し後まで、社会の父系的組織編成を喚起するものは何一つない」（起源1・上197頁）。

しかし、メソ紀30世紀（前3世紀）になると、現在のモンゴル地方にいた匈奴の間に、父親の権威を前提とする家族組織が観測されるようになります。

「すでに紀元前3世紀には、洗練された政治的構造化が、モンゴル地方の匈奴の許で姿を現わし、次いでトルコ人とその様々な後継者たちの許で姿を現わした。部族の左翼と右翼への割り振りと、……高官たちの複雑な序列が知られている。こうした制度的発達は、より昔の「スキタイ」諸民族においては知られていない。」（トッドによる Lebedynsky I., *Les nomade*, p29からの引用。前掲198-199頁）

ここでは、兄弟を自動的に左翼と右翼に割り振り、平等に軍事機構（＝官僚機構）の一翼を担わせるシステムが確認されているのですが、なぜこれが「父系的組織編成」（父親の権威）の証拠となるのかというと、「子供の族内での地位を自動的に割り振る」ためには、前提として、単系制（通常は父系制）が成立している必要があるからです。

→ 子供が父の世帯に属するか母の世帯に属するかが決まっていないシステム（双方制）の下では、まず「どちらに属させるか」を決めなければならないことになり、彼らを自動的に左右に割り振るということはできませんね。

そういうわけで、このシステムは、「父系的組織編成を喚起する」システムであるということになるわけです。

では、遊牧民における「父系制」（男性の権威）はどこから来たのか。トッドは、ここに、すでに直系家族の成立を見ていた中国の影響を想定しています。

もちろん、中国ではなく、中東が起源である可能性も考慮しなければなりません。その上で、トッドが「中国」と結論したのは、ちょうどこの時期に、東方の遊牧民が新たに軍事的優位を獲得したことが検知されているためです。

「フン人（匈奴と同系統とされている）の出現以来、ステップの力関係は逆転する。それまで西から東へと向かってきた支配的征服の動きは、逆向きの風にとって替わられる。西に向かうウラル・アルタイ語系諸民族の拡大に他ならない。…… 私としては、東の諸民族の新たな軍事的

優位は、ステップ東部のクランが中国との接触によって父系変動を起こしたとする仮説によって、かなりうまく説明がつくように思えるのである。」

中国の定住民からの影響で、父系と兄弟の平等を組み合わせた遊牧民のシステムが生まれた後、相互影響のベクトルが変わります。次は、遊牧民側が、中国文明に影響を与えるのです。

(2) 定住民と北方遊牧民の相互行動—共同体家族の確立

中国の定住民が営んでいた直系家族の上に、遊牧民クランの特徴である兄弟の対等性を貼り付けてみて下さい。はい。これが、父親の権威の下に平等な兄弟が横に並ぶ、共同体家族システムの誕生です。

トッドは、この変化が秦で始まり、秦による中国統一の原動力となったと想定しています。

「秦は地図上で全く特殊な地位を占めていた。北西にあって、ステップの遊牧民と直接接触していたのである。」

「多数の蛮人部族を併合して行ったこれらすべての征服は、歴代の秦伯を北部と北西部の遊牧民…との直接の接触状態に置いた。共通紀元前4世紀の間に行われた秦伯の軍隊の大改革の原因は、おそらくこの事実に戻すべきである。…歴代の秦伯は、…操作しにくい戦車集団を廃して、騎兵部隊に切り替えた最初の人たちだった。…歴代の秦伯が絶えず勝利を重ねることができたのは、おそらく、鈍重な戦車軍団を翻弄したこの軽装備部隊の軽快さのおかげである」

(トッドによるアンリ・マスペロ『古代中国』からの引用。起源1・上208頁)

共同体家族システムの優位は、軍事的要素だけに止まるものではありません。

「父系のクランは、文民社会の中に樹立された軍隊のようなものである。定住システムに投影されるとなると、それは軍隊の再編を引き起こすことになるが、純然たる行政型の合理化も引き起こすかもしれない。」

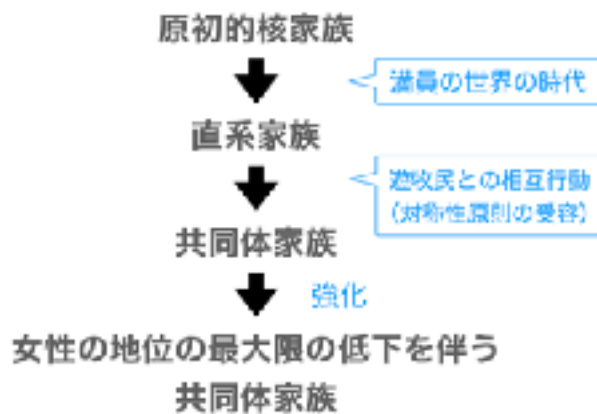
「対称（シンメトリー）の概念は、帝国という観念にとって本質的に重要である。国家に適用されれば、それは臣民・地方の平等性となる。

土地に固定された農民ないし貴族の家族に採用されるなら、それは兄弟間の平等性として具現する。父系共同体家族の競争力の優位は、その経済的帰結の中に存するのではなく、文民的ないし軍事的な組織編成に関わる含意の中に存するのである。」（起源1・上208-209頁）

中国は、メソ紀29世紀（前4世紀）頃の匈奴を皮切りに、46-47(13-14)世紀のモンゴル、50(17)世紀の満州人に至るまで、遊牧民との相互行動を繰り返し経験しています。これらの集団はみな、同じ家族システムを担っていたわけですから、中国にとって、「クラン的対称という遊牧民の原則は、何度も何度も繰り返し叩き込まれた教訓だったのである」（209頁）。

システムは「成立すればそれで終わり」ではありません。定着してからの時間の中で、強化されたり、（事例としては稀ですが）減弱したりするものです。

中国の場合には、メソ紀3100-3200年頃（前200年-100年頃）の共同体家族の登場から、漸次そのシステムを強化し、メソ紀4200年から4250年（900年から950年）頃は、女性の地位の最大限の低下を伴う、強固な共同体家族システムを持つ社会になりました（この頃、女性の纏足の習慣が生まれます）。さしあたり、これが、中国における「進化」の最終形です。



この中国のサイクルを範型として頭に置いていただくと、メソポタミアからはじめまる世界史がぐっと分かりやすくなるはずですよ。

それでは、いよいよ、時代をさらに数千年遡って、メソポタミアに移動しましょう。

